

乗り物あれこれ

大正十年になると、徳山自動車商會が設立され、徳山を基点としてフォード幌型六人乗りの乗り合いバスが往来するようになった。自動車の登場に関わらず、一般の輸送は依然として馬車や荷車に頼ることが多かったようである。

やがて昭和八年頃になると、トラックがよく見られるようになり道路への影響が大きくなっていった。その後戦争時代に突入すると、ガソリンの入手が困難になって、木炭バスを走らせなければならなくなった。

戦後次第に復興してくると、昭和三十四、五年頃には小型バスが山間部にも普及するようになり、合わせて道路の舗装工事や橋の架け替えなどが急ピッチで進められた。同三十七年には徳山と益田間に鹿野を経由して急行バスが開通している。同四十年代に入ると、家用車が普及し始めた。

一方、海上交通は懸案であった大津島航路に、平成十六年四月五日「フェリー大津島」が就航した。この船は、急速な高齢者社会の進展に対応して、公共交通機関を利用した移動の利便性・安全性を促進する「交通バリアフリー法」に対応した船舶として建造されたものである。

したがって船内は、バリアフリー対応トイレ、車椅子スペース、バリアフリー客席、運行情報提供装置等の設備を装備している。また高い操舵性能を確保するためにフラップ付舵や可変ピッチ型サイドスタスタ等の最新鋭の航行設備を装備している。この船の就航により、大津島の住民の利便性の向上と島の活性化に寄与している。

さらに平成十九年四月十六日に「鼓海二」が就航し、徳山港と大津島間を十八分で結び、船内はバリアフリーで車椅子要のトイレやスロープ、電動リフトも備わっている。定員一五〇人で五便が往復し、回天記念館の見学にも大変便利になっている。

（小川 宣）



大正時代のトラック（周南市〈徳山市〉・大正時代） 材木の運搬はもっぱら馬車に頼っていた時代、須々万の江村商店はトラックを購入して材木の運搬を始めた。自動車はフォード社製のトラックで、写真は須々万の飛龍八幡宮で安全祈願をしたときのものであろう。（玉野知之氏提供）

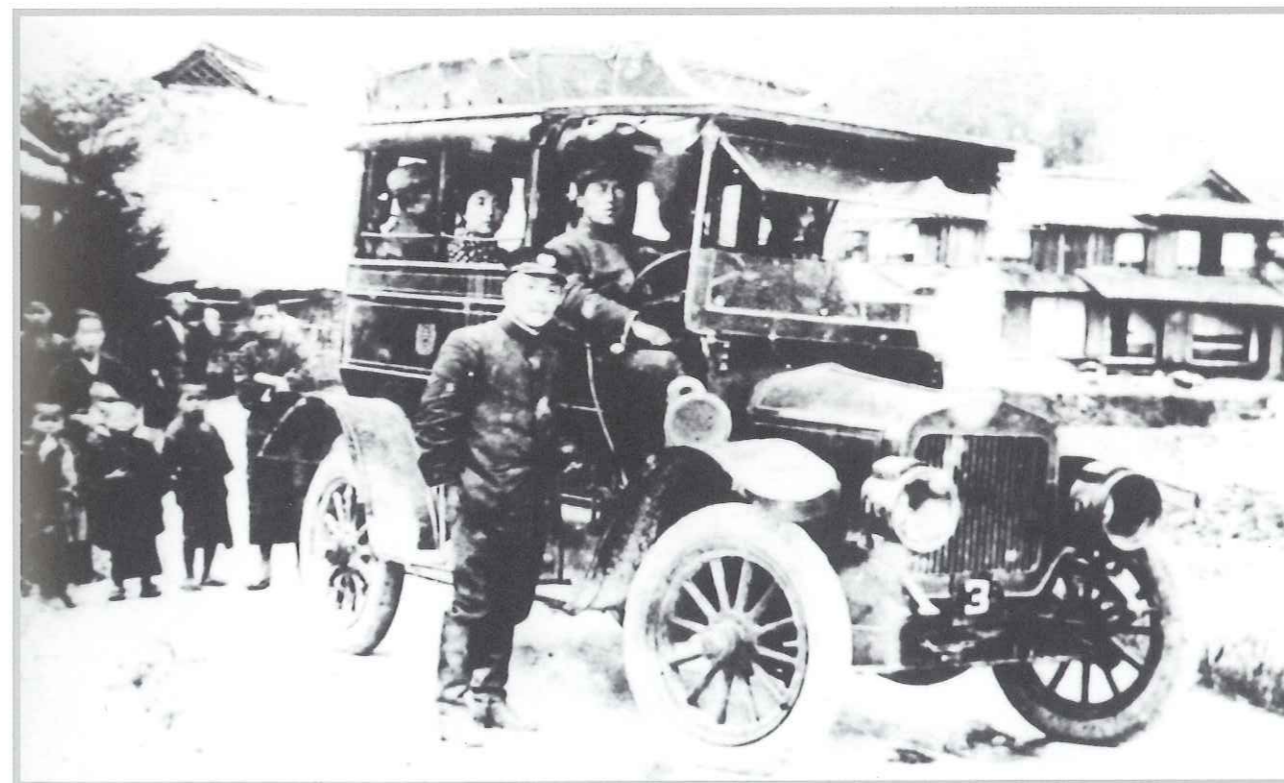
自家用車第1号（周南市〈徳山市〉・大正2年） 徳山に初めて自動車が来たのは、明治33年頃で、県警の購入した車が巡回してきたが、自家用車としては大正2年、市内北山の岡氏が大阪から船で運んだフォードの自動車が山口県では第1号といわれる。写真は江口から富田にいたる松並木の旧街道を行く雄姿。（玉野知之氏提供）



産業祭の出光興産のパレード（周南市〈徳山市〉・昭和33年） 産業祭は石油コンビナートの発展につれ、年々参加の団体も増えて趣向も高度となり産業都市にふさわしい祭となった。全市をあげてのにぎわいに彩りを添える出光興産の車。（河村寛次郎氏提供）



スクーターが普及（周南市〈徳山市〉・昭和33年） 昭和30年代に入ると、人々の生活がしだいに安定するにつれて、手軽な交通手段としてスクーターを愛用する人が増えた。ラビットという愛称で親しまれたスクーターが瞬く間に普及した。（河村寛次郎氏提供）



乗合自動車（光市小周防・大正10年） 明治30年、山陽鉄道が徳山まで延長されると、光地区では唯一、島田駅が開設された。もともと島田川流域は昔から拓けた地域ではあったが、島田駅を中心に高水、高森、呼坂方面へと、次々にバス網が整備されていった。これより先、大正3年には、島田駅～呼坂間にはすでに乗合馬車が運行していたことが勝間村史に見える。この写真の乗合自動車は、島田駅～今市間を運行したもので屋根に自転車を載せているのがおもしろい。（野田徳彦氏提供）